076　今昔物語　　020924

◎参長谷男依観音助得富語第二十八＜はつせに　まいるをとこ　くわんおむ　のたすけによりてとみをうる＞

◎これは、昔話で有名な　“わらしべ長者”だが、昔話自体が“今昔物語”を下敷きにしているとか・・。

◎今昔物語には、「仏教を信じていれば　いいことがある」というように仏教を布教する精神に満ちている、仏教を信じることが幸せにつながると説く。この話は京に住む男が、奈良の長谷観音を信じ長らく通い念じていたゆえに幸せが訪れたと展開していく。ふと、観音様とはなにかな、なんて不敬なことを言うが、お寺に鎮座する仏像は“仏さん”と思っていて今までそう呼んでいた。菩薩、観音、などの区別がわからない、ネットで調べると説明が複雑でよけいにわからない。野にあるものは木造であれ石像であれ“地蔵さん”と呼んでいる。ネットの画像を見れば、オレが仏さんと呼んでいるものがほとんど観音さんのようでもある。と、思いきや日光菩薩、月光菩薩もあれば、月光菩薩観音という表現もある。「ええい　すべて　仏さんで　いいや」

◎解説に：本話が長谷寺霊験譚として成立する以前からすでに同類の民間伝承が存在していたと想像する。この長谷寺霊験譚が伝播流布していったのには、長谷寺勧進聖の勧進活動が大きい役割を果たしたという説がある。

◎勧進聖：勧進帳なんて言葉はおぼろげに知っていた。「寄付を募る」ぐらいのことかと思っていたが、調べると奥が深い。勧進とは元々は仏教的な教えを人々に広めることを指していたらしい。この行為は奈良時代からおこなわれていたらしい。それが後に社寺仏閣の造営修繕のための募金活動を指すようになった。11 世紀になると、勧進聖という言葉が表れ出し、幕府や朝廷という公権力が任命する勧進聖もあった。勧進聖は独立したもので、勧進聖も寺社もお互いを必要としておこなっていたのかな。

考えるに、田舎の村に勧進聖がやって来て、ガマの油売り風に大演説をしたところで、寺社のための大金を寄付する人はいなかったのでは。十石聖や木食聖のように、見かけだけでも清廉潔白な御仁が、頭を下げてお願いすれば、大金を積む人もいたかもしれない。浄財か詐欺かなんてうんさ臭い話もたくさんあったのでは・・。

◎勧進：乞食のこと。物乞いのこと。五木の子守歌：「おどま　かんじんかんじん　あん人達あよか衆　よか衆よか衆　よか着物」「自分は　かんじん（乞食）の子　あの人たちは　いいとこの人　いい着物いい帯・・」

◎今は昔、京に父母も妻もなく、知人もない青侍がおった。ある日長谷に参り観音の御前に向かって、「私は貧乏で、なに一つ貯えもございません。もし現世でこのままに終わってしまうものならば、この観音様の御前で、餓死してしまおうと思います。もしまたなんとか少しでもお恵みいただけますならば、このことを夢でお示しくださいまし。そうしていただかない限りわたくしは絶対のここを出ていかないつもりです」と言って、そこにひれ伏したままだった。

寺の僧たちはこれを見て、「このような様で伏しているお前はいったい何者だ。食事する所があるとも思えない。もしこのまま死んでしまったら、寺に汚れが生じるだろう。それにしても、おまえの師僧は誰なのだ」と聞くと、男は、「私は貧しいものです。どなたも師僧と頼むべきお方はおりません。ただ観音様におすがり申しておるだけです。食事するところもありません」と答えた。

寺の僧たちはこれを聞いてみな集まって相談し、「この男はひたすら、観音様におすがりするだけで他に身を寄せる所もない。これは寺にとってえらいことになろう。しかたがないから皆で力を合わせて、この男の面倒を見てやろう。と決め、かわるがわるものを食わせてやると、男はそれを食べながら仏の御前を去らず、昼夜を分かたず祈念していたが、いつしか二十一日に及んだ。

◎寺の僧たちも意地悪をせず、飯を分け与え男を黙って見逃している。

さて男は夢を見る。「お前が出ていく時、最初に掴んだものを　賜ったものだと思え」

男は寺を出て行ったが、門のところでけつまづいて倒れた時に、手に一本の藁を掴んでいた。

藁が、みかんに、みかんが布三反に、布が立派な馬に、立派な馬が田に変わっていった。

男は田を小作にまかせ収穫の半分を得た。それからどんどん豊かになっていった、と、さ。

077　北小松　　050924

◎今日は、半月前に白山に行って以来の山行である。いつもの定点コース、北小松駅から比良駅までのコース、ひろみさんと二人である。若いころの話はしてはいけない、自慢げに話してはいけない、過去の栄光を体力を語ってはいけない、もう立派なジジイなんだとわかっているが、き恥かしくなるが、このコースは好きで何度も来ている、ちょっと言わせてくれ。10 年前までは北小松駅から、釈迦岳、北比良峠から武奈ヶ岳、イン谷口に降りていた。駅から釈迦まで 3 時間ちょっとで通過していた。当時はバスなど乗ったことはない。5 年前ぐらい前から武奈ヶ岳はちょっとしんどいとパスして、北比良峠から降りていた。最近はもっぱら、釈迦岳から降りている。今年の 2 月の積雪期、この時は釈迦直下で時間切れそのまま折り返した。その時、これから登りだというあたりで人が蠢いている。近づくと爺さんが登っていた。オレが今言ったのと同じようなことを言い、若いころは、と降りて行かれた、83 歳だそうだ。今日も夏バテのバテ具合を知りたくて、定点コースを歩いて、どれくらいこの暑さで身体が弱っているいのか試してみたかった。

◎8：15 北小松駅を出発。勾配のある林道、うしろから陽が差しじりじり熱い、まだ朝の 8 時過ぎなのに夏のようだ。登山口に 10 人ぐらいの人だかり、「お　みなさん　登るのかな」そう思っていたが上には登って来られなかった。暑さがこたえる、夏バテ兆候、一本目は普通に歩けたが、まもなく涼峠（すずみとうげ）という手前で、「こらあ　しんどい　だいじょうぶ　かな」と情けない状態だけれどなんとか到着。凍ったゼリーをパンを食べすぐに出発した。長そでのシャツは汗でべったり、タオルハンカチもべったり、ズボンまで濡れてきた。

◎涼峠は、すず峠と呼んでいたが、正式には、すずみ峠だそうだ。空は青い中に白い雲と薄黒い雲が混じっている。予報では武奈ヶ岳で 3 時頃に 40%の降水確率となっていた。600M ぐらいを超えやや涼しくなってきた、風も吹き出した、足取りが軽くなってきた、これはいい兆候だと喜んだ。が、相棒は暑さに弱いタイプ、相当きつそうだけれど、モクモクと登っていく。このコースは長くてしんどい、ほんとしんどいコースである。

◎半分ぐらい登ったところで樹林帯が終わり、左下を見れば琵琶湖が広がり、前の方は上へ上へ山が続く、「あれれ　釈迦が真っ黒の雲に包まれている　降っているのかな　まだ午前中なのに」ひろみさん、「いてて　攣った　ふくらはぎ　薬　水」ザックを開けて葡萄の粒をもらった、冷たい、美味い、暑さに冷たい果物が口の中で広がる。ひろみさん、月 10 回ぐらい山に入る方、それがこの暑さで半月ぐらい家にひき籠りだそうだ、「筋肉が　体力が　弱っている」叫びが聞こえる。

◎12：00 釈迦岳に到着。「え　誰もいない　なんで　不思議」「この　クソ暑い夏の日に　どなたも山は　敬遠されているのかな」何日か前にも知人の山行の話、「ただ　暑いだけ」とけんもほろろの口調だった。

◎「さっきから　蜘蛛の巣　顔のべったり」「がはは　そうなんよ　べったり」先頭を替わったら悲鳴が聞こえる、人が入っていない山、降りて樹林帯に入ってきた、強い力の蜘蛛の巣が顔べったり、タオルで拭いてまた歩く。上は涼しかったが、高度が下がるとジトリ暑さがぶり帰ってくる、一歩一歩慎重に岩ゴロの道を下っていく、水が流れる石ころ道を歩いていく。

◎イン谷口まで下りてきた。「まず　湧水を飲んで　身体を拭いて　上着を着替え」と疲れ切った頭で考えていた。「え　水が出ていない」昨日も降ったはずなのにと訝りつつ、「パイプが上手く　ささってないのかな」と飲むのはあきらめた。流れた水にタオルを浸し、頭、顔、身体を拭きザックの中のシャツに着替えた。

◎今日は人がいなかった、北小松の登山口に何人か人がいたが、その人たちも登ってこなかった。ヤケ山であんちゃん一人と会ったが汗をかいた風もなく下っていった。今日は人を見ていない、釈迦のてっぺんも人っ子ひとり居なかった、おかしいねえとイン谷口に下ってきた。「あれれ　車がいない　一台もいない　なんで・・」「駅まで行って　自動販売機で　ジュースでも買おうか」と歩き出した。バス停にメモが張ってある。「6 月 29 日の土砂崩れによる通行止めで、バスは運行していません」と書いてある。イン谷口からも通行止めの大きな看板、人も車も通れないようだ。6 月 29 日と言えば我々3 人がここに降りてきて、「バスがあればいいなあ　あれれ　車が一台もないよ」と驚いた日だ、あの日以来の土砂崩れのままなのだ。当日、歩く途中向こう側で重機の音がしていた、「ほう　早いね　すぐに　直るかな」ぐらいに思っていた。

078　夏バテ　　110924

◎「健忘症だって・・」と笑っていたが、「えっ」ということを日々あれこれ忘れている。この、「えっ」は、「なんだ　そんな　つまらんことか」ということがほとんどなんだけれど、なにかの戸を閉めを忘れた、なにかのスイッチを押し忘れた、「なんだ　そんな　つまらんことか」である。であるがそれが日に何度もあって、「「ついに　来たか」「ボケだね」なんてことである。

◎今まで朝起きて、これをして、あれをしてと、我ながらリズミカルに動いていた、いや、動いていたはずなんだけれど、とるに足らないひとつひとつだが、「あれをし忘れた」「あ　忘れた」自分で気付くこともあれば、家族から指摘されて、「あれれ」と思うことある、その回数が増えてきた、毎日何かを忘れている。

◎この健忘症は、この暑さのせいだ、毎日 35 度を超える猛暑が続きオレの身体は悲鳴を上げている、身体の悲鳴が心の方にもやって来て、ものを忘れるようになっている、「この夏が終われば　暑さが落ち着けば　元のしっかりした　オレに戻るはずさ」とたかをくくっているが、さてさて見通しはいかに。

◎そらあ　クーラーの　効いた部屋で　ぐっすり寝むりゃ　いいわな
◎昼間は外に出てはいけないよ　熱中症だよ
◎なんといってもジジイなんだから　まごうことなき（紛う方ない）　老人だよ

◎去年までは夏バテは知らなかった。加齢かね、それとも今年は去年より 1 度以上暑いというのが原因かな。地球温暖化というが、ここまで来ると、オレはヤダねえ。

◎最近よく山に行っている。「老人は　月に　10 回は　山に入らないと」豪語するご仁がいる。今まで月に 2 回ぐらいのペースで行っていたが、その倍近くのペースになってきた。おもいきり歩けるコース、テント泊を利用して信州の山を日帰りで駆け抜けるコース、身体にあっている山の登り方で満足はしているが、昔の仲間の軽いコースから離れつつある。「「軽いコースを」「テント泊がしたい」声が上がっているが、「ごめん　オレは今　忙しい　お連れできない　コース　バッカで」

◎トヨタに車検の予約に来ている。「トヨタなんて　高いんじゃないの」「いやあ　仕事は　ばっちりだよ」ま、今回は、トヨタで買った中古車　たった 60 万円の品物だけど」なんて見積もりを待っていると、「17 万円也」の見積もり書がやって来た。「むむむ仕方がねえか　次回からは　よそで　しようぜ」

◎先日来 2 回も仕様もない（しょうむない）事故をしている。大嶺の釈迦ヶ岳の帰り道で、登山口から少し帰ったところで、こぶし大の石ころを踏んでしまった。石ころが跳ねる音が聞こえ、しばらく走るとタイヤがおかしい。同道の難波さん、窓を開け、「なんともない」といいながら、「あれれ　前だ」車を斜面のある林道の端に止め見いった。「くそお　やった　どうしよう」ここはまったく電波が入らない、山の中の事故やら故障は大変だ。何年か前の北岳のプッツンが思い出された。この時はタクシー運転手をしている近藤さんと、もうすぐ夜叉人峠の入り口というところでプッツン止まってしまった。人家がそばにあったので電話を借り半日近く経って車屋が来てくれたが、「ヒューズが飛んだだけ　こんなんで　お金いただくのは」と恐縮しながら 1～2 万円を払った。このパンクも JAF が来てくれたのは 3 時間後だった。

◎もう一回はこれも山で、なんてことないところでさあ出発と左にハンドルを切って、ガリガリである。これも修繕に、「15 万円也」とおぬかしになる、そらあできない、あきらめた、「くそお」である。

079　今昔物語　130924

於鈴香山蜂螫殺盗人語第三十六　＜すずかのやまにして　はち　ぬすびとを　さしころすこと＞

◎この話は前にもここに登場したかもしれないが・・。伊勢国を往来して巨富を築いた京都の水銀商人が、伊勢国より、百余頭の馬で莫大な物資財貨を輸送中、鈴鹿山の盗賊団に襲撃されたが、日ごろ飼いならした蜂を呼集して盗賊団を殲滅し、彼ら多年の蓄財まで手に入れてますます栄えた話。

◎奈良の大仏：金と水銀のアマルガムを、銅で鋳て造られた大仏の表面に塗布し、加熱することで水銀が蒸発し、金メッキができた。有毒の水銀ガスによって多数の死者が出たと言われる。

◎辰砂：硫化水銀：三重県の丹生鉱山、奈良県の水銀鉱山、徳島県の永井鉱山。縄文時代以降ベンガラ（酸化第二鉄）と共に、赤色顔料として利用されてきた。辰砂：硫化水銀鉱を採掘、粉砕して精製する貴重な資源であった。辰砂の原石を、割って赤い部分だけを取り出し、石臼で潰したのち、水で比重選鉱し、さらに細かく潰すという非常に手間のかかるものであった。古墳時代になると棺の中に大量の朱が敷かれていた。

◎みづかね：水銀のことをこう呼んでいた。

◎鈴香：鈴鹿だそうだ。

◎本文中に、伊勢国の悪口が書かれている、「えらい　ひどい　言い方だ　伊勢の人は　読まない方がいいよ」

◎とりわけ、伊勢国というところは、父母のモノでも奪い取り、親疎を問わず、貴賤を選ばず、互いに隙を窺い相手をたぶらかし、弱いものの持っているものを平気で奪い取って自分の所有とするひどいところである。だが、この水銀商がこのように昼夜となく行き来しても、どういうわけか、彼のモノだけは取ろうとしなかった。

◎ところで、どういう盗人だったのか八十余人が一味をなして、鈴鹿山で諸国の行き来の人の持ち物を奪い、公私の財物を取り、それらの人を殺して年月を送っていたが、朝廷も国司もこれを逮捕できなかった。
ところがある時この水銀商が、伊勢国から馬百頭余りにさまざまな財物を担わせ、いつもと同様、年少の童に手綱を取らせ、女たちを連れそれに食事の支度などさせながら京に上っていたが、この八十余人の盗人がこれをみつけ、「なんとえらい馬鹿者だ　こいつの持ち物はことごとく奪い取ってやろう」とおもい、鈴鹿の山中で一行の前後に立ち、なかに取り込めて脅したので、童どもはみな逃げ散った。そこで荷を負うた馬はみな追いかけて奪い、女どもの着物は残らず剝ぎ取って、追い払った。

水銀商は、浅黄色の打ち衣に青黒いろの打ち狩袴を着け、薄黄色の綿の厚い着物を三枚ほど重ね、菅笠をかぶり、牝馬に乗っていたが、命からがら小高い丘の上に逃げ登った。盗人もこれを見て、「あいつ　どうで　たいしたこともできなかろう」とたかをくくって、みな谷に入っていった。
さて、八十余人のものはめいめいに気に入った品物を先を争って分け取った。それを別にとがめだてするものもいないので、のんびりしていると、水銀商は高い嶺に突っ立って、まるでなんとも思わぬ様子で大空を見上げながら大声で、「どうした　どうした　遅いぞ　遅いぞ」すると一時間ばかりして大きさ三寸ほどもある恐ろしげな蜂が空に現れ、ブーンブーンと羽音を立ててそばの高い樹の枝にとまった。

◎無数の蜂が盗人ひとりひとりに取り付いて、ことごとく刺し殺してしまった。一人に百匹、二百匹の蜂がとりつこうものなら、どんな人間でも助かるはずはない。
じつをいうと、この水銀商は自宅に酒を造っておき、他のことにも使わず、もっぱら蜂に飲ませて大切にしていた。だから、彼の持ち物は、どの盗人も奪わなかったのだが、事情を知らない盗人が奪い取ろうとして、このように刺殺されたのである。
今昔氏：されば、蜂さえもものの恩は知っていたのだ。

080　釈迦が岳　150924

◎10:30 登山開始、階段を上り始めた。「え　涼しい　寒いとは言わないが　半袖シャツでは　すずしいぐらい」翌日の昼間にこれを書いているが、我がアトリエの温度計は 33 度を指している。30 度を超えると暑いだるい不快だ。天空は青空が 2、白い雲が 2、薄黒い雲が 5 という割合。最近よく利用する気象庁の山の天気というのがある。一日前の予報では、夕方 3 時頃から雨が降るようになっていた。3 時や 4 時なら下山のころ、いい感じじゃないかと思っていた。この涼しさは嬉しい、久しぶりの感覚、きつい冷房のあるビルに入った感じ、身体の隅々まで涼しさが染み渡る、「ああ　これをまっていました　山はこれじゃないと」である。蒸し風呂のようなじりじりの陽ざしの中、エイコラ登るには力が湧いてこない、「この涼しさだぜ」と小声で叫んでいる。

◎「これは　ひめしゃら」「この樹は　硬い　かたいから　太鼓の胴とか　餅の臼とか・・」それを聞いて、「おお　ひめしゃらか　知らなかった　が　きれいな色の　樹だ」とあらためて思った。径が 50 センチ以上もある大きな樹、木肌がボコボコのデコボコを手の平で叩いてもぴしゃり硬そうな感触、暗い色の森の中で茶色というか黄土色というかにょきり突っ立っている。ネットで見ると紅葉が最高に素晴らしいと出ている、総門山が素晴らしいと出ている、大台付近らしいが、いずれ覗いてみたい。

◎朝 6:30 高槻在住の Y さんが自転車でやって来た。「それじゃ行きましょうかと出発した」八尾の久宝寺駅を 7:30 集合だったが、高速を使うと 30 分で着いてしまった。「早いねえ」と話していると、いつも早く着く M さんがとことこ歩いて来た。「八尾の T さん迎えに行ったろうか」「今　まだ家　迎えに　行くって」ということで八尾郵便局まで車を走らせた。M さんも駅に着いていたので、5 人で 7 時半に出発した。高速代をケチって、「松原から乗ろう」と地道を南の方に少し走って高速に乗り、高田バイパスから京奈和道、五條で降り 168 号線を新宮方面に進んだ。今年になって 3 度目のこの山、コンビニの場所も安いガソリンスタンドの場所もわかってきた。168 号線と 169 号線がほとんど並んで奈良から太平洋まで走っているのだということ、その両国道の間にあるのが、大嶺山系だということを再認識。

◎地面にコガネムシの死骸がいくつも転がっている、コガネムシといっても玉虫のように青く黒く怪し気に光っている、玉虫厨子の玉虫に似た色だ。これまたネットで探すと、“ハンミョウ”という昆虫に遭遇、これはすごい、美しい。転がっているコガネムシにしろ、実物があまりお目にかかれない玉虫にしろ、色みが、緑や黒に輝いているが、ハンミョウはそれぞれ色が独立して光っている、見つけた感動が覚めぬうちに記しておく。

◎30 ほど歩き始めたころに、「ミストだ　これはいい　涼しいねえ」とつぶやくような霧が冷たく吹いてきた、雨じゃないからいいねえといっていたが、なんだか小雨が降ってきた。「予定より　半日　早いんじゃないの」と思うが小雨なのでカッパも出さず、ザックカバーも出さず、カメラも養生せずそのまま歩いた。ポコリンとした尾根道、前の方か霧で隠れる、夏の暑さには気持ちがいい。

◎草と土の地面の上に小型獣の骨が並んでいる、多分鹿と思うが頭骨、大腿骨、背骨の部分がいくつか、まっ白に洗ったように生々しく並んでいる。土の中で放置された干からび状態じゃなく、妙に白々しい生っぽさが、どなたが並べたものかと錯覚させる。こんなきれいな骨は初めて見たよ。

◎途中雨が降ったが、降ったりやんだりで強い雨にはなっていない。「2 時間 10 分で　登って　きたよ　すごいジジババ　パワー」釈迦の横で弁当を広げた。今日はごはんがあったので　梅干しと胡麻を振りかけ、野菜炒めをほり込んで持ってきた。少し多めのごはん、腹一杯になった。ミニトマトと漬物をいただいた。往路ではオレンジを、復路では葡萄をいただいた、果物は美味い。

◎「あれれ　なんだ」「ツキヨダケ」「ええ　すごい　登るときに　あったっけ」径が 30 センチぐらいの朽ちかけた立ち木に、うちわぐらいの大きさの、猿の腰掛風に、30 個ほどひっついている。これは素晴らしい、いい景色だ、しっとり雨模様の中、大きな花が開いたようだ。嘔吐、下痢、腹痛を起こす毒茸だが死には至らず一週間ぐらいで回復するそうだ。ブナの朽木に育ち夜は緑色に発行するらしい。

◎帰る途中の尾根で、3.4 人の若者がテントを張っていた。「今日は　今から　雨なのに・・」雨のアウトドアーはつらいね。

081　今昔物語　240924
民部大夫則助家来盗人告殺害人語第十三＜みんぶのたいふ　のりすけ　の　いえにきたる　ぬすびと
せつがいの　ひとを　つぐること＞
◎巻第二十九には、盗人の話がずらり並ぶ。気に入っている女盗人の頭領の話は第三にある。
◎検非違使：平安時代初期の創設された検非違使庁の役人。現在の警察、検察の役目。流通監督、治水、裁判
等にも参加するとか
◎放免：11 世紀から放免の文献が見られる。元々、罪を犯して囚人となったあと、計らいをもって放免となった者で、犯罪者の情報収集などの捜査に、前科のあるものを検非違使長が採用した者。方面になったのちも罪を犯した者がいたようだ。
容姿は、口髭顎髭を伸ばし、巨大な棒を持ち、藍染めの上着を着ていた。非人とみなされ畏怖される存在でもあった。
無罪放免というように現在でもつかわれている言葉。
◎強盗などの犯罪、刃物を持って押し入り、銭、布などを盗っている。刑に流刑、徒刑などがある。流刑は京を中心に、近流＜越前、安芸＞、中流＜信濃、伊予＞、遠流＜阿波、伊豆、常陸、佐渡、隠岐、土佐＞
伊豆は戦いに敗れた武士や公家の流刑地であった。
◎驚くことには、この 400 年足らず、正式の死刑の記録はない。

◎今は昔、民部の大夫〇〇則助というものがおった。
軽く書かれているが、高級役人である〇〇則助がいた。夕方家に帰ってくると馬小屋から男が出てきた。
「だれだ」
「内密に申し上げたいことが　ございます」「早く言え」「本当に内密です」
「私は盗人です　栗毛のお馬を　盗もうと門から入り　様子を見ておりました」
「奥様らしき人が来て　男に耳打ちをして　矛を持たせ　屋根の上に登らせた」
「これはまずいことが起こりそう　と　黙って見ておれず　こうして　お知らせしているのです」
これを聞いた則助は、盗人の男に、「隠れて待て」といい、屈強な男 2.3 人を連れてこさせた。
則助は、松明をともし、屋根に登らせると、しばらくして、天上から水干装束の侍ほどの者を捕らえて引きずり出してきた。

◎そこで、この男を尋問すると、
「私は　何某の従者です　もはや隠し立てはいたしません」
奥様が
「ここの殿がよく寝いられたら　天井から鉾を刺し降ろせ　下で穂先を胸に当てがった時　おもいきり突き刺せ」
とおっしゃったので、と白状したので、この男を捕らえ検非違使に引き渡した。

このことを告げた盗人を召しだして、欲しがっていた栗毛の馬に鞍を置き、屋敷内で馬に乗せ、そのまま追い出した。その後その盗人がどうなったかわからずじまいになった。

◎妻に、間男にあって、企んだことだろうか。だが、夫は、その後もその妻と長く連れ添っていた。

◎この盗人の後日談が聴きたいねえ。
この夫婦の後日談も。いたく、み～は～なオレなり。

082　ぼやき　250924

◎久しぶりに昼間の河原を走っている。昼間といっても走り始めたのが3時半、今、安威川河川敷にいる。安威川右岸の土手の中を北に向かって走っている。自転車でここまで来る道中、お陽さんが照っているので庇の付いた山用の帽子を被って走ってきた。土手に登り階段を降りると、土手で西陽が遮られ帽子が要らないぐらいである。半ソデシャツに半パンツの服装だがシャツの中に涼しい風が通り心地いい。先日までのうだる暑さがパタリと止まり、朝夕は「寒い　かな」というぐらいに極端なパタリ具合である。昼間もアトリエの温度は30度そこそこ、やや熱いが扇風機の風をあたり心地いい。

◎絵もね、ぼちぼちエンジンかけて描いている。暑い間、アトリエの温度計が 33 度を超えたあたりから、心身がぼやけ、身体はぐたりとなり、頭はぼ～っとぼけてくる、やる気がなくなりへなへな座り込んでしまう。昼を過ぎたあたりから 37 度を記録し始める、そんな日が毎日続く。予報士も甘い言葉はくれず、危険な暑さがこの先しばらく続くとおぬかしである。あまり大きな声で、「どんな　格好で　寝ている　どんな　ところで寝ている」なんてことは言いたくないが、寝ているところにはエアコンはない、扇風機だけである。朝起きる、6時か7時に起き出すが汗をかいている、温度計を見ると30度を超えている。寝る時は扇風機をかけて寝る、2時間とか4時間のタイマーをかける、その時に温度計を見ると33度の暑さである。

◎午前中の2時間3時間絵に向かうようにしてきたが、夏の間は“ボウ～っと”で筆が動かなかった。涼しくなったとはいえ昼下がりの一番熱い時は30度デコボコ、これはだいぶ楽である。30度だと一応普通生活は送れる、とだらだら前置きが長い、饒舌だねえ。
今朝、7月に出来上がって、サインを入れている50号の絵を引っ張り出してきた。「こらあ　ちと　よくない」とアトリエの壁に立てかけながら思っていたが、「どうすりゃいい　どこを　どうすりゃ」という次の一手が浮かばなかった。涼しくなった今朝、多少クリヤーになったオレの頭が、「あそことあそこに　あの色を入れて乾いたら　フットイ刷毛で　ざっくり赤色だ　赤は　バーミリオンに　ちょっとクリムソンを混ぜたもの」オレの感性が指令を出した。そのついでに、20号の進行中の次の一手も、これまた指令が来た。
小さいほうは、赤色絵の具をたっぷり塗りつけ、擦りつけ、同じ絵の具を水っぽくして何滴か垂らしてみた、垂らしたところが盛り上がり朝の光を受けて水玉が輝く、「こらあ　いい」とその部分を写真に収めたが、時間が経つと盛り上がりがへこみ、ただの平面になって、「あれれ　もう　いっぺん　描きこまねば」と思案している。

◎今日は10時に歯医者の予約が入っていた。7分前に家を出たが、信号を待つこともなく2分で着いた。保険証を見せ2.3分待っていると名前を呼ばれいつもの個室に案内された。「うがいを」と言われうがいをして、「倒します」と椅子が倒れ、顔に布をあてがわれ金属の棒で歯茎をちくちくつつかれる。いつも1時間以上かかっていたが、今日は40分足らずで終わった。3ヶ月に一度の検診、丁寧に磨いて擦ってくれる。一割負担で1100円である。その帰り、もうひとつわが家に近い内科へいつもの薬をもらいに行く。血圧を測り、今日はだぶだぶズボンの話、一割負担で500円也。時間は待ち時間3分、診察時間1分ぐらいかな。

◎明日は車の車検に出すため、自転車を積んで、鳥飼の淀川付近のトヨタまで、10時にもっていく。「トヨタの車検は高いよ」言われていたが試しに見積もりに持っていった。17万円也である。先日タイヤを4本変えたのが6万円也。自動車保険が7万円ぐらい。今日、JAFから封書が来て継続金4000円也。山の道具が高い高いとぼやいている、ぼやきながらも買っていないが、山のそれら、ザックとシュラフとテントを買っても 10 万円でおつりがくる。もっともメーカー品の上等を買えば、ザックが5万円、シュラフが5万円、テントが5万円と、15万円ぐらいになるかな、それでも車の半分なり、トホホだね。

083　今昔物語　270924

鬼現板来人家殺人語第十八＜おに　いたとげんじ　ひとのいえにきたりて　ひとをころすこと＞

◎鬼が、板の姿に変身して、人を殺しにやってくるとは、妙な話、ケタイな話。なんで、板なのだ。

なにゆえ、“板”なのだ、調べたが答えは出てこない。思うに、当時、布、紙ではいかんのか、柔らかいものは殺傷能力に欠けるかも。ならば鍋や鎌、スキやクワでは・・、これなら殺傷能力もあり、いかにも鬼が変身しそうなものでは。当時も今も材木はたくさんある、どこに行っても生えている。材木を切って板にする労力はあるものの、人件費が安い当時、大汗かいて作った板といえども、貴重品ではなかったのかも。板がひらひら飛んで行って、人を圧殺する様がいいのかな。

「鬼の大変身」ネット検索で絵本がある。「鬼は外　福は内」鬼は、豆を叩きつけられたくないために変身をする話らしいが、さてどのような変身なのか、このあたりの発想が、オレにはいっこうに湧いてこない、絵本作家の発想、感性の力量のみせどころ。

◎地の底から湧き出る奇怪なもの、鬼やら、霊やら、「怖い　こわい　恐ろしい」と肝を冷やしている人々がいる。「恐い　なにが　そんなに　こわいのか」オレは思ってしまうが、今でも、「ちょっとしたことが　怖い　恐ろしい」という人が多い。千余年前の王朝世界に、武闘集団、武士が浮き上がってきた。宮廷にあっての武士は、そこに下がっていよと言われ、ただの家来、地位の低い身分だが、武闘集団には、パワー、力があった。この武闘勢力が頭をもたげてきた時代の変換期、マロの世から、侍の時代への変換期を今昔氏が書いているのかな。

◎南面の放出（はなちい：母屋について外に張り出した部屋、応接、接客用：吹き出すこと、排出：大阪の放出（はなてん）は、大和側の水を放出していた）

◎今は昔、ある人の屋敷で、夏のころ、武道自慢の若い侍が二人いた。南面の放出の間にいて宿直をしていた。この二人はもともと武道の心得があり、〇な田舎出の者共で、太刀など持って、寝もせず世間話などしていた。一方また、諸司の三等官で五位ぐらいであろうか、この屋敷で幅を利かせている先輩ふうの侍が奥の宿直として、ひとりで出居で寝ていたが、この男は二人のような〇の心得もなかったので、太刀。刀も持っていなかった。

夜もしだいにふけるころ、放出の間ににいた侍がふと見上げると、東の対屋の屋根のうえににわかに一枚の板が現れた。

「あれはいったい何だ　あんなところに　今頃　板が出てくるはずがない　もしかしたら　誰かが　火でもつけるために　屋根に登ろうと　しているのかも知れぬ」

と二人声をひそめて話し合っているうち、その板が次第にじりっじりッと延びて、七、八尺ほども出てきた。驚いて見ているうちに、この板がにわかにひらひら飛んで、この二人の侍のいる方に降りてきた。これは鬼に違いないと思い、二人の侍は太刀を抜き、近寄らば切り捨ててやると、各々の片膝をつき、太刀を取り直して待ち構えていると、板はそこへ寄って来ず、そばの格子戸にほんの少し隙間のある所から、こそこそと入っていった。

入っていったと見ると同時に、その内は出居にあたっており、そこに寝ていた五位の侍がものに襲われた人のように、二、三度ほどうめき、そのあと声もしなかったので、二人の侍は驚き騒ぎ、走り回って人々を起こし、「これこれこういうことがあった」と告げた。

その時、人々が起き出して、灯をともして近寄ってみると、その五位の侍はぺちゃんこになって〇殺されていた。板は外に出ていったとも見えなかったが、内にも見当たらなかった。人々はこれを見てすっかり震え上がった。五位はすぐに外に担ぎ出した。

思うに、この二人の侍は太刀をもって切ろうとしていたので、板はそこに近寄れず、中に入って、刀も持たず安心して寝込んでいた五位を〇殺したのであろう。

◎今昔氏：されば男子たるものはどうあろうと、太刀・刀は身を放たず持っているべきである。